2018.9.9　年間第２３主日

エッファタ「開け」

マルコによる福音　7:31-37

（そのとき、）イエスはティルスの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた。人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、「エッファタ」と言われた。これは、「開け」という意味である。すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった。イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされた。しかし、イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえってますます言い広めた。そして、すっかり驚いて言った。「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

説教

エッファタの掛け声とともに奇跡をおこなったイエスさまは、誰にも言ってはならない、と口封じを命じます。

> **イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされた。しかし、イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえってますます言い広めた。そして、すっかり驚いて言った。「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」**マルコ 7:36-37

「この方のなさったことはすべて、すばらしい」ガリラヤの人たちは称賛しますが、わたしたちはこうなってはダメです。人間は称賛することで隷属します。誰かを褒め称えることは裏を返せばその人の奴隷になるということで

す。福音の読み解きはこうです。イエスは人々の隷属を望んでいない、だから賞賛を受けることを拒否する、誰にも言うなと口止めをします。
いずれ、わたしたちは主人を選ぶ時がきます。宗教が社会のいしずえとなっていた時代とは違う世界を生きているわたしたちは、洗礼などの宗教儀礼とはべつに人生において決断をするときが、つまり主人を選ぶときがきます。そのとき、わたしたちは誰に従うのか決断を迫られます。ほうとうのところ神に従うのか、それともべつのなにか（お金とか、頼れる誰か、頼れる仲間・組織）に従うのか。主人が権力なのか、権力が主人なのか。
疑いつつ従う。迷いつつ信じる。これはせかんどチャーチの隠れテーマです。矛盾しているような、煮え切らないような、頼りない感じですけれど、人間はそう単純でもないので、ややこしく複雑でもいいじゃないですか。きょう、そうだそのとおりだ、と思い、また、あすになるとちょっと待てよ、こうかもしれない。それでいいんです。
ずいぶんと前になりますが、ある信徒さんとおしゃべりをしていたら、一週間に一度というタイミングはいいなと彼がいいました。どうして、と尋ねるとだいたい忘れるころだから、とちゃかされました。教会は社会の規範とはべつの価値を大切にするところです。礼拝の出席回数や奉仕の度合い、献金額などがひとを測る基準とはなりません。もちろん礼拝は宗教儀礼ですから神をたたえ、イエス・キリストを褒めたたえます。でも、ほんとうのところでの信仰は教会や礼拝とは別に、ひとりひとりのこころに育ちはぐくまれるものです。

> **谷川の水を求めて、あえぎさまよう鹿のように、神よ、わたしはあなたを慕う。わたしの心はあなたを求め、神のいのちにあこがれる。**詩篇 42:2-3

わたしたち一人ひとりに希望のともし火が宿りますように。